

宣長国学における歌——敷島の歌・うひ山ぶみ・著書名——

田中 康二

一、問題の所在

平成二十五年度日本思想史学会大会のシンポジウムにおける「越境する日本思想史——思想と文学の垣根越え」というテーマは、思想史学と文学研究の間に「境」が存在し、「垣根」があることを示すと同時に、それらが「垣根」を隔てて隣接していることを含意している。つまり、そこには共通点と相違点が混在しているのである。むしろ両者を隔てるものは相違点であり、それはおよそ三つの範疇に整理することができる。それは学術原理としてのパラダイム、情報取得のタイムラグ、知識基盤としてのリテラシーとい

う三点である。このうち学術原理としてのパラダイムは各領域の存在理由に関わるので一朝一夕に論じることはできないし、情報取得のタイムラグは相互の努力によって埋めることができる。ここでは知識基盤としてのリテラシーについて考えてみたい。思想史学には思想史学の、国文学には国文学の知識基盤がある。それは対象となるテクストを正確に読み解くことができる能力、それを的確に位置づけることができる能力と定義することができる。

国学における知識基盤としてのリテラシーとは、要するに和歌に関する見識である。旧稿でも指摘したが、国学者は日常的に和歌を詠み、和歌を詠むことが日本古典文学の研究をすることの基盤となっていたということを、われわ

れは忘れてしまっている^①。それは漢学者が漢詩を詠むのと同じく、学問と文芸が切っても切れない関係にあったという重大な事実である^②。そこで、本稿では本居宣長と和歌との関係を取り上げて、文学研究の側から国学を見る観点を提示し、それが国学研究にとって有効かどうかということを検証したい。便宜上、敷島の歌・うい山ぶみ・著書名という三点にわたって考えてみたい。

二、敷島の歌

宣長の歌と言えば、佐佐木信綱が「全体を通じて生彩が乏しい」（『近世和歌史』第四章「荷田在満本居宣長及鈴屋派」）や村岡典嗣が「遺憾ながら第二流、もしくは以下」（『本居宣長全集』第二十五冊『石上稿』「解題」）と評したのははじめとして、おおむね不評である。そのために、真剣に宣長の歌に取り組む研究はほとんどなかった^③。そういった中で、宣長の歌として例外的に人口に膾炙したものが敷島の歌である。次のようなものだ。

これは宣長六十一寛政の二とせといふ年の秋八月に
手づからうつしたるおのが、たなり 筆のついでに
しき嶋のやまごころを人とは、朝日ににほふ山ざく
ら花

これは還暦の年（寛政二年（一七九〇））の秋に詠まれたものである。この歌は自画像への自讃歌として詠まれたものであり、自分の死後にはこの自画自賛を月命日に掲げるように遺言書の中に記している。ところが、この歌の真意は正しく理解されてきたとは言えない。むしろ、誤読と曲解にさらされてきた歴史がある^④。

ともあれ、すでに手垢の付いたこの歌をめぐって、思想家と国文学者の間で見方が決定的に異なるように思われる。思想家は往々にして上句を対象にして考察をめぐらすことが多い。それは「大和心」という宣長が好んだ用語が上句に詠み込まれているという要素が大きい。「大和心」は「大和魂」や「皇国心」などと並んで、宣長が排斥した「漢意」の対概念であるからである。日本古来の「大和心」のありかがこの歌に詠まれていて、それが「日本の道」を真正面から論じた『古事記伝』『直毘霊』と共鳴して、宣長の思想を探り当てるヒントになると考えるのであろう。「直毘霊」はすでに明和八年（一七七二）に成立しているが、数度の改稿を経て刊行されたのは寛政二年九月のことであり、奇しくも敷島の歌の詠まれた年と一致する。そういったことも思想家がこの歌の上句に関心を寄せる理由であると思われる。

一方、国文学者は下句に関心を向けることが多い。「朝

日に匂ふ山桜花」は「朝日影匂へる山の桜花つれなく消えぬ雪かとぞ見る」(新古今集・春上・九八・藤原有家)を本歌として、これを下敷きにして詠んだ表現である。宣長の新古今集注釈書『美濃の家づと』(寛政七年刊)では、この本歌について「めでたし。上句詞めでたし」と絶賛している。つまり、宣長は自らが好んだ新古今集歌を本歌として、その表現を借りながら、日本人の心の麗しさをたたえたという解釈をするわけである。⁽⁵⁾なお、『美濃の家づと』初稿の成立も寛政二年三月のことであった。

思想史家の見解も国文学者の見方も、ともに根拠のある解釈であり、追究の方向性は間違っていないが、宣長が実際に詠んだ歌であるという点を考慮すれば、その歌の詠まれた文脈に即して考える必要があるだろう。すなわち、当該歌が膨大な宣長の詠歌の中でどのような位置取りをしているかということである。

宣長の詠歌稿を収める『寛政二年庚戌詠』(『石上稿』、『鈴屋集』三之巻に採録)に、次の歌を見出すことができる。

桜花の梢に朝日のかたかきたる絵に

岩戸出し朝日にほふ山桜さもおもしろき花盛かな
敷島の歌とこの歌との関係について、次の三点から考えてみたい。

(一)この歌は寛政二年六月頃詠であり、敷島の歌と詠歌時

期が近接する。

(二)どちらの歌も絵に基づいて詠んだ題画歌である。

(三)どちらも「朝日にほふ山桜」という表現が含まれる。この三点から、敷島の歌と「岩戸出し」の歌は詠まれた状況や表現が酷似していると言つてよい。そうであるとするれば、敷島の歌の下句の生成過程に「岩戸出し」というイメージが重ねられていたと考えることは極めて自然なことである。「岩戸出し」朝日とは、言うまでもなく天照大神神が岩戸籠もりから出て、闇に包まれた高天原も葦原中国も明るくなるといふ神話を踏まえている。敷島の歌の「朝日」が天照大神(日神)が岩戸から出てきたというイメージを有しているのであれば、この当該歌もまた「大和心」への関心とは別の方向で、天照大神を中核とする宣長の古道論とシンクロすることになる。このような解釈は、宣長が歌人であるという前提から導き出された試案である。

三、うひ山ぶみ

次に『うひ山ぶみ』の言説解釈をめぐって、歌人としての宣長の内実を考えてみたい。初学者入門書『うひ山ぶみ』(寛政十年成)の冒頭には、宣長の学問に対する総論が置かれている。次の如くである。

世に物まなびのすぢ、しなぐ有て、一やうならず。そのしなぐをいはば、まづ神代紀をむねとたてて、道をもはらと学ぶ有。これを神学といひ、其人を神道者といふ。又官職儀式律令などを、むねとして学ぶあり。又もろくの故実、装束調度などの事を、むねと学ぶあり。これらを有識の学といふ。又上は六国史其外の古書をはじめ、後世の書共まで、いづれのすぢによるともなく、まなぶもあり。此すぢの中にも、猶分ていはば、しなぐ有べし。又歌の学び有。それにも、歌をのみよむと、ふるき歌集物語書などを解明らむるとの二やうあり。

学問には古道学・有職の学・歴史学と歌学があるという。問題は末尾にある「歌の学び」への言及である。この箇所は簡単なようで意外と難しい。一般にこの箇所は「歌だけを詠むのと、古い歌集とか物語の書などを解釈するのとふたとおりある」などと口語訳されている^⑥。また、この項目は「実作と研究」（白石良夫）といった注釈が付されている。はたしてこの解釈は正しいのか。

「歌をのみよむ」の「のみ」は「たゞ其物其事ばかりにして、ほかの物ほかの事のまじらざるをいふ詞」（『玉あられ』）という意味（限定）であると宣長は考えた。もし詠歌や実作という意味であれば、「歌をのみよむ」ではなく

「歌をよむ」とすれば十分であろう。ここで「のみ」を用いたのは宣長のこだわりであって、単に歌を詠むということと強調するためではない。実はこの箇所に関して、『うひ山ぶみ』の自注（「後世風の中にもさまざまあしきふりありあるを云々」）の中で「歌をよむ事をのみわざとすると、此歌学の方をむねとすると、二やうなる」とパラフレーズしているのである。つまり、「歌をのみよむ」は詠歌・実作だけを行うことであり、「ふるき歌集物語書などを解明らむる」は古い歌集や物語の解釈を主として行うという意味である。後者は古い歌集や物語の解釈だけを行うわけではない。それを裏付けるように、宣長はこれを「歌をよむのみにあらず、ふるき集共をはじめて、歌書に見えたる方の事を、解明らむる学」と言い換えているのである。ここは歌を詠むだけでなく、研究も行うというのが宣長の真意であった。

宣長の意図を『うひ山ぶみ』の生成過程という観点から見てみよう。『うひ山ぶみ』は三度の改稿を経て成稿するが、該当箇所を抽出すると次のようになる。掲出本文は推敲後のものを採用した^⑦。

〔初稿〕歌ヨムコトヲモハラトシテ、歌書ヲ学ブスデアリ。コレ又一ツ也。コノ歌学ニ又オノツカラニヤウアルガ如シ。一ツニハモハラ歌ヲヨムコトヲノミスルト、歌

ブミヲ明ラムルト也。

〔再稿〕又歌ブミヲ学ビ、モハラ歌ヲヨムアリ。コレ歌学ト云。此歌学ニ又オノヅカラニヤウアリ。ヒタスラ歌ヲヨムコトヲノミワザトスルト、歌書ニ見ヘタル事ヲ明ラムルト也。

〔三稿〕又歌の学びあり。それにも歌をのみよむと古き歌集物語書などを解き明らむるとの二やう有。

三稿の推敲後はほぼ版本と同じである。初稿と再稿とで試行錯誤の跡がうかがえるが、最終的に「歌をのみよむ」となる言説は「モハラ歌ヲヨムコトヲノミスル」(初稿本)や「ヒタスラ歌ヲヨムコトヲノミワザトス」(再稿本)のように、「ノミ」という語によつて、詠歌・実作を専門とすることが強調されていることがわかる。となれば、もう一つの「歌の学び」は、詠歌・実作だけではなく「歌ブミ・歌書・古き歌集物語書」を解明することを指すことになるだろう。

つまり、宣長の分類は詠歌と研究の二種類ではなく、詠歌専門と、詠歌に加えて文学研究も行つという二種類ということである。それではなぜ後者を「研究」とする誤読が生じたのか。それは「歌の学び」を近代以降の研究専門の学問としての「歌学」と無意識のうちに同一視してしまつたからであろう。そして、その誤解が生じる原因は、近代

以降の国文学者が歌を詠まなくなつたということが大きい。もつと限定していえば、太平洋戦争後の国文学者が歌を詠まなくなつた。自らは歌を詠まずに歌書を研究するというやり方に慣れて、国学者は必ず歌を詠む、自ら歌を詠まない歌書研究などありえない、という当たり前の事実を忘れてしまつたのである。宣長自身は「歌の学び」について、「歌学といへば、歌よむ事をまなぶことなれども」と記している。「歌の学び」(歌学)とは、第一義的には歌を研究することではなく、歌を詠むことを学ぶことだったのである。考えてみれば、佐佐木信綱や村岡典嗣は研究者であると同時に歌人でもあつた。

『うひ山ぶみ』は入門書として現代でもよく読まれている。そして、その平明にして達意の表現のゆえに、口語に訳し終えた時点で、『うひ山ぶみ』を解釈しおせたと勘違いしてしまつている。だが、本当にそうだろうか。学問分類論という基本的なところでミスをしてしまつていたのである。もしかすると、我々は根本的なところで宣長の精神を汲み取り損なつているのかもしれない。

四、著書名

国学において、詠歌という裏付けのない研究(歌学)は

ありえない、という前提で宣長の著作を見渡すと、興味深い現象に気付く。宣長が出版した著作の書名である。一般に古典文学作品の注釈は「○○抄」や「○○注」といった書名が伝統的である中で、宣長の著作には趣向を凝らした雅びな書名が多いことはよく指摘されるところである。ところが、それらの書名には一定の傾向が見出せるのである。それはその著作に込めた意図を歌に詠み、その歌に詠み込まれた歌ことばが書名になっているという事実である。

そのことは処女出版の『草庵集玉箒』の時点で始まっていた。「玉箒」という書名は稲掛棟隆の序文に「かの諺解難註の塵あくたにうづもれし草のいほりはききよめつる心もて、玉ば、きとつけてん」と説明されている。香川宣阿『草庵集蒙求諺解』と桜井元茂『草庵集難註』が垂れ流した悪弊を掃き清めるという見立てで命名されたという。宣長はこれよりさきに『梅桜草の庵の花すまひ』という戯作風の注釈を著しており、『諺解』と『難註』を対象にした批判を行っていた。『玉箒』はこれをバージョンアップした注釈である。宣長はこの書名を詠み込んだ歌を序文等に置くことはしていないが、刊行後に次のような贈答歌を交わしている。

おのがかきたる玉箒といふふみをみて、大円上人
もとより

玉。ば。き。手にとるからにわきかねし草の庵の道もまよ
はず

かへし

君が手にとるとしきけば玉箒みじかき程を見んもはづ
かし

大円上人は伊勢度会郡海蔵寺の住職で、宣長の門弟である。大円が称賛し、宣長が謙遜するという構図である。この贈答は明和五年十二月中旬頃に交わされたものと推定される。⁹⁾「玉箒」は、あらかじめこのような歌を詠むために付けられた書名であるかのように思われる。この贈答がきっかけというわけでもなからうが、このあと宣長は書名を詠み込んだ歌を著作に披露するようになる。一通り見ていくことにしたい。

たとえば、語学書『てにをは紐鏡』（明和八年十月刊）には、次の歌が掲げられている。

てらし見よ本末むすぶひも鏡。三くさにうつるちゞの言
葉を

後に「係り結び」と呼ばれる「てにをは」の法則を整理した一覧表が『てにをは紐鏡』であるが、この歌の第三句「ひも鏡」が書名となっている。この第三句に書名を詠み込んだことには理由があつて、この第三句がタイトル部分に大書され、その他の句は細書されているのである。あた

かもこの歌に詠み込まれるために付けられた書名であるかのごとくである。つまり、この歌とタイトルとは切っても切れない関係であるということである。内容だけでなく、書名とタイトル揭示の手法も踏襲しているということができよう。同じく語学書『玉あられ』（寛政四年春刊）にも、内題に続けて次の歌が詠み込まれている。

玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめ
ぬ枕を

この歌が書名の由来を示すものであることは言うまでもない。歌意は、この『玉あられ』によって注意を喚起し、間違った語法に慣れきった人々の目を覚まさせるということである。自序にこの歌を置くことは、歌と著述内容との密接な関係を表すものである。

また、古道論書にも書名が歌に基づいた著作がある。『玉くしげ』（寛政元年十一月刊）には次の歌が巻頭に置かれている。

身におはぬしづがしわざも玉くしげあけてだに見よ中
の心を

歌意は、身分不相応な自分の進言ではあるけれども、心のうちをせめて開けて見て下さい、といったところ。紀州藩主の徳川治貞に献上した時に詠まれた歌である。古道論書においても、その内容を伝える歌を詠み、歌の一節を書

名にしているのである。

当然のことながら、文学書の書名は例外なく、詠まれた歌に基づくものであった。以下、列挙することにした。

○『玉勝間』一五冊、随筆、寛政七年六月刊（第一編¹⁰）
言草のすゞろにたまる玉がつまつみてこゝろを野への
すさびに

○『菅笠日記』二冊、旅日記、寛政七年七月刊
ぬぐもをし吉野のはなの下風にふかれきにけるすげの
を笠は

○『新古今集美濃の家づと』五冊、注釈書、寛政七年十月刊
これをだに家づとにせよいせの海かひはなぎさのもく
ずなりとも（歌稿）

○『古今集遠鏡』六冊、注釈書、寛政九年正月刊
雲のゐるとほきこずゑもとほかみうつせばこゝにみ
ねのもみぢ葉

○『美濃の家づと折添』三冊、注釈書、寛政九年三月刊
家づとに残れる花もをりそへつおなじ山路の末をたづ
ねて

○『源氏物語玉の小櫛』九冊、注釈書、寛政十一年五月刊
そのかみのこゝろたづねてみだれたるすぢときわくる

玉のをくしぞ

○『うひ山ぶみ』一冊、初學者指南書、寛政十一年五月刊

いかならむうひ山ぶみのあさごろも浅きすそ野のしるべばかりも

○『神代紀髻華山蔭』一冊、注釈書、寛政十二年春刊

神ぬしのうすの山かげかつら蔭見ればたふとき神代しおもほゆ（再稿本）

○『後撰集詞のつかね緒』一冊、注釈書、享和二年五月

つかねてぞそれとも見ましあやめなかりみだりたる言の葉くさは

○『枕の山』一冊、歌集、享和二年夏刊

いねがての心のちりのつもりつ、なれるまくららのやまと言の葉

○『万葉集玉の小琴』一冊、注釈書、天保九年三月刊

かきならす玉のを琴をこゑしりてよけくあしけくさかむ人もが

これらの著作に付された書名は、著述内容を表す歌に詠み込まれるための命名であって、著作と書名と歌との密接な関係を見て取ることができる。歌を詠むことと研究することは、宣長において密接な関係であったことが立証され

たと思われる。

五、結語

以上のように、三つの観点から「宣長国学における歌」について検討した。宣長にとつて詠歌とは、われわれが通常考える以上に重い意味を有するものであり、単なる文人の嗜み以上の意味を持っていたと考えることができる。最初にも触れたように、宣長の歌は下手であるという紋切り型の評価によつて、われわれは宣長の歌の世界に入る機会を失っているといえる。また、「物のあはれを知る」説という歌論や物語論から演繹して宣長の文芸思想を追究するといった研究が、いやになるほど繰り返しておこなわれているが、それらはほとんど縮小再生産の域を出ないというのが率直な感想である。テキストから遠く離れて、宣長のキーワードやテクニカルタームを操作しながら宣長の思想を語るといふ、生産性の低い習慣はやめた方がよい。それよりも、テキストに即してそこに内在する本質をあぶり出すような方法のほうが、時間はかかるが、はるかに建設的だといえよう。宣長の歌に關しても、歌の出来の良し悪しという点だけでなく、歌を詠むという行為が持つ意味や、詠歌を中心とした作品研究という点から、改めて宣長国学

を見直すことによって、宣長の時代に即した宣長国学の理解が可能になると思われる。

たとえば、宣長は中世和歌の古今伝授的な秘伝や秘説の価値を否定し、近代的な文献実証主義を奉じて古典研究をおこなったといわれるが、宣長自身は京都留学中に二条派の地下歌人に入門して歌を詠んでいる。頓阿の『草庵集』を生涯、歌の手本とし続けたのも二条派歌学の残滓と考えられる。つまり、宣長の歌学は中世歌学の延長線上に成立したものと考えるのが自然だ。歌を詠むことに対する執着が人並みはずれているところも、中世的である。要するに、宣長国学は中世歌学と地続きであったということである。そういった意味でも、詠歌が重要である。そして、宣長国学の本質を理解するためには、歌を解読するというリテラシーを身に付けることが必要だと考える。

注

- (1) 『江戸の文学史と思想史』（井上泰至と共編、ぺりかん社、二〇一一年）「国学」参照。
- (2) 前掲書所収の池澤一郎論文参照。
- (3) 近時、山下久夫『本居宣長』（日本歌人選、笠間書院、二〇一二年）が出版されて、宣長の歌が少しだけ表舞台に出たが、研究が低調であることに変わりはない。

- (4) 拙著『本居宣長の大東亜戦争』（ぺりかん社、二〇〇九年）および『国学史再考——のぞきからくり本居宣長』（新典社、二〇一二年）参照。

- (5) 『藤垣内答問録』における伴信友の問いに本居大平が宣長の意見として答えたもの。

- (6) 佐佐木治綱『古典日本文学全集』三十四卷（筑摩書房、一九六〇年）、石川淳『日本の名著』二十一卷（中央公論社、一九七〇年）、河上徹太郎『日本の古典』二十一卷（河出書房新社、一九七二年）、白石良夫『本居宣長「うひ山ぶみ」』（講談社、二〇〇九年、初版は右文書院、二〇〇三年）は微妙な表現は異なるが、異口同音である。

- (7) 杉戸清彬『「うひ山ぶみ」の初稿本『濃染の初入』——書誌と翻刻』（『椋山女学園大学研究論集』十二卷二号、一九八一年）参照。

- (8) 拙著『本居宣長の思考法』（ぺりかん社、二〇〇五年）参照。

- (9) 『石上稿』「明和五年戊子詠」中の前後の歌の日付参照。
- (10) 膽吹覚『「玉勝間」の巻頭言に関する考察（前編）（後編）』（『福井大学教育地域科学部紀要 人文科学（国語学・国文学・中国学編）』第三号、第四号、二〇一三年一月、二〇一四年一月）は、『玉勝間』各巻の巻頭歌を含む巻頭言について検討している。

（神戸大学教授）